

同じ大学で学ぶ仲間との相対的な位置をイメージしたことも別の道を選んだ理由であると語っている。

「…やっぱりこう、この大学に入って周りの何かこう秀才たちに囲まれて、色々こう教員のことを知っていくうちに、あ、結構教員って教えるとか人の前に立って話すとか、そういう単純なものじゃないなっていうのがすごい身に染みて感じて。すごいマルチタスクな部分もあるし、教員としてこう威厳を保つというか。そういった点でも、やっぱりこう他の人たちは何かこう、子どもたちから尊敬されてるといいうか、先生として見られてるのに、自分だけちょっと何かこうなめられてるじゃないですけど、ちょっと何かこう、教員として見られてないというか。そういったところもバイト先とかでも感じながら、そういった点でどんどんどんどん教員に向いてないのじゃないかなっていったところは、3年生の初めぐらいから感じるようになりましてね。」

かれらの判断がそのまま的確な判断と言えるかどうかは定かではない。つまり、過度に自己規制してしまう結果をもたらしてしまう可能性がある。と同時に、そうした選択の結果、多様性に満ちて大らかな人的構成によって教員集団が成り立たなくなる遠因ともなっている。むしろ、雑多でも自身の意見を述べたり人とかかわって補い合ったりする関係性の中で生きていける若者を教職はもっと引き付けるべきではないだろうか。

④ジェンダー関係と子育て不安

改めて指摘するまでもなく、しんどさはだれにも同じように受け止められるわけではない。ここでは、ジェンダーをめぐる偏りの問題を指摘しておきたい。社会的・文化的性差であるジェンダーは、当該社会の性別構造を通して、性ごとに異なる進路選択へのインパクトを与えている。教職に関してもジェンダーは重要な視点を提供している。

ここでとりわけ重要なのが「子育ての当事者意識」というフィルターである。性別役割分業意識（「男性は仕事＝公的領域」&「女性は家庭＝私的領域」）は時系列比較データでは、どんどん解体されてきたことを示している。しかし、実際にはジェンダー・ギャップ指数に見られるように、この国の政治と経済の領域における男女格差は先進国でも最下位のグループに属している。そのような社会的・文化的背景の下では、労働環境の劣悪化は当該職業を女性が選択する意欲を大幅に削いでしまう。ジェンダーの問題として指摘しなければならないのは、「子育て」というライフイベントを視野に入れ、その意味で「教職との両立」の困難さを予期的に認識するのが圧倒的に女性であるという事実である（A、B、E、Q など）。

高校時代の教員との交流等から教員の異常な働き方に触れることで、自分の将来と重ね合わせる例も見られる。たとえば、Aは多忙化を打開する方法を考えるために教育学部への